嘉永七寅十一月四日五ツ過地震大ニゆり候ニ付はたしにて裏へにけ出。急西ノ屋根くすれ瓦落る。誠ニおそろしくあきれいたる時凡多葉こ五六ふくの間也。雄輔万二郎等外山ノ帰りかけ道二丁歩行ノ間ノよし。やかた町ニ而女ら走り出互ひニ手を取合こけぬ用心せしとの事。大ニ恐れ居たるに、翌五日七ツ過大地震久しくゆる。庭へはせ出候処、昨日よりはけしく立居る事不成。木を取付居る内二階の瓦落る音ニおとろく内、ひさしやね崩るゝ。大ほうの如き音七八声ひゝく。何共不分。始ハ雷鳴と思ひ、空ハ真黒ニしてすさましく天地之大変ト生たる心地なし。只神仏ノ御名をとなへおそれいるうちやうやく止。此度ハ昨日□十そうはい、暮六ツ過又ゆり四ツ比四日ノ朝ぐらい。近所ノ家くすれたをるゝ音に心もきゆることく。庭ニて一夜をあかす。夕飯未こしらへされハ、此処へこんろ土ひん持来るに、たゝ入事おそろしく早々取来る。皆一カ処へ寄つたふてふとんの上ニ寄かゝりいぬる間なく明けり。朝迄ニ五六度。

六日朝人々来り咄しを聞に昨夕ひかた黒江辺へ津波上り、屋根迄つかり、波ニ引レ行候。大成石橋流れ、或ハたんすの引出しへ魚類入たりト言。雷鳴カ地なりと聞たる七八声ハ波の音にてありしとの事。伝法橋くいへ大成船ともこみ合われ、筏の上へ舟打上。廿四五艘も込入もみ合ト聞く。又三部下と云川原へ二三百石位の舟川原ニすわり有之。とふして来りしや不知。大勢してうこかすに中々不動。人力のおよふ所にあらず。梶も折大ニ破そんしたるよし也。畑ハさけて内よりとこ土はみ出たるよし。川近辺ノ人ハ舟の内へにけ入候処、かのつなミにて又舟ニ居かたく、又上り、併老人子供ハ思ふやうに得うこかす。なく声かしましく、又老人と子を見うしなひしとて、あわてさかす者も有。併是らハ幸ニたすかりし由さまさま成へし。